

粉雪が降ってくる 凍えそうになるから  
古希を迎えた私は いい加減にしなければならぬ  
人・こと・ものの 仕分け統合  
片付けをしなければならぬ  
雪がしんしん積もってくるから  
凍えるのは私だが 見ているのはだれでもよく  
老いの特権を行使して 生きる装備は最少にして  
“ 人生それだけのことさ ” に耐え  
自分のことは棚に上げ  
夕焼けが何処かの国での朝焼けであれば  
遍照もたまにはあることを祈って  
ままよ 空の点滅  
一行詩に群れて 残照編を書くことにする

やがては消える 人・こと・ものの自裁  
何を残すか 欠かすことのできないものは  
独断だ 気合いだ ばっさばさ  
わが人生の証など 大したことではないと装い  
時は色を変え 悲しみが心を癒す  
「 老人は荒野をめざす 起て老いたるものよ 」  
ふと点滅する若き日の キャンパスの替え歌  
早とちりも覚悟のうえ 詩の遺言を書くとする

\*

いまわたし とぼとぼ七〇歳 二〇一四年  
色は時に生まれる 交差点の渦の光りに  
人は蠢き流れ わたしは戯れる  
鉤物よりわたしにも届いた 孔雀石の光りの変化  
崖を飛ぶ風神の子 一陣の風の如く来たり  
いまを跳べ 淵の深さを 髪をなびかせ  
いまだ 野っばしりの如く  
残照編へ

\* 「新老人の思想」 五木寛之 著

幻冬舎新書 より